

竜の棲む

1. 竜を買う

坂の途中にある店で、竜を買った。夏の暑い日のことだった。住宅街を抜けて坂を少し登ったところに私が勤める葬儀屋がある。葬儀屋に勤める以前は、小学校の学校司書をしてきた。同僚の教師と問題を起こして辞めたのが二十七のころ。それから恋人に何年か飼われて、あげく捨てられたのが三年前。行く当てもなくふらふらしていたところを、葬儀屋に雇われたのである。

葬儀屋では、電話番号をする。電話を取る仕事である。電話を受けたら別の社員に電話をかわる。事務作業は派遣社員が行う。私の仕事は電話を取ることだけ。雇われた、というほどのことはなく、つまりはただの数合わせである。

竜を買ってしまったから、これを飼うのだということに気がついた。すでに大きく育ちすぎた竜は売れ残りだった。安く売られていなければ買うこともなかった。

竜の鱗は色がなく、剥がしても剥がしてもきりがないように思われた。

「飼われたらお仕舞いですね」と、そのうち竜が言い、それからぬめりと光って水の底に消えた。霧のような結晶のような、さらさらした光が少しの間あたりに舞った。

「お仕舞いですね」と、また竜の声。

私の目の前に、人の形が現れた。

「飼われたので仕方ありません」

竜は今度は、人の声でそう言った。十七歳ぐらいの男の子のように見えた。

そうして竜はすっかり、私の部屋に棲みついてしまった。今や私の部屋にあるのは、竜と私だけであった。

実際、私の部屋にはなにもなかった。恋人がいなくなつてから、冷蔵庫もベッドも、すべて捨ててしまったのだ。家はがらんどである。そもそも私は以前から、ほとんど家に帰っていないかった。毎日のように飲み歩き、その日出会った行きずりの誰かと小汚い連れ込み宿で眠って、朝方着替えのためだけに家に帰る。それが私の生活のすべてであった。男だろうが女だろうが、性別は関係なかった。職場を追われ、恋人に飼われながらも、私はそれをやめることがで